ROKKO

普及版

吉川英治代表作品

悠久の大自然と治乱興亡果てない大陸の歴史が育くんだ複雑な中国の人と心。魏蜀呉三国の覇権と政治の妙に学ぶ生甲斐と身の処し方。改めて日中文化の関連と我が人生とはとを考える自戒の書。

吉川英治

三国志

（一）

吉川英治

三国志

第一巻　桃園の巻

三国志　1巻（全10巻）　0093-00210-9216

昭和31年11月20日　初　版　発　行
昭和53年12月20日　新装第8版発行
著　者　吉　川　英　治
発行者　賀　來　壽　一
発行所　株式会社 六興出版
東京都文京区水道2－9－2　〒112
電話東京(943)3431 振替東京 1-92448

印　刷　図書印刷株式会社
製　本　株式会社　明　泉　堂
落丁本，乱丁本はお取替えいたします

© 1975 Fumiko Yoshikawa, Printed in Japan
定価はカバーに明記してあります。

序

三国志は、いう迄もなく、今から約千八百年前の古典であるが、三国志の中に活躍している登場人物は、現在でも中国大陸の至る所にそのまま居るような気がする。——中国大陸へ行って、そこの雑多な庶民や要人などに接し、特に親しんでみると、三国志の中に出て来る人物の誰かしらときっと似ている。或は、共通したものを感じる場合が屢々ある。

だから、現代の中国大陸には、三国志時代の治乱興亡がそのままあるし、作中の人物も、文化や姿こそ変わっているが、猶、今日にも生きているといっても過言でない。

×

三国志には、詩がある。

単に尨大な治乱興亡を記述した戦記軍談の類でない所に、東洋人の血を大きく搏つ一種の諧調と音楽と色彩とがある。

三国志から詩を除いてしまったら、世界的といわれる大構想の価値もよほど無味乾燥なものになろう。

故に、三国志は、強いて簡略にしたり抄訳したものでは、大事な詩味も逸してしまうし、もっと重要な人の胸底を搏つものを失くしてしまう惧れがある。

で私は、簡訳や抄略を敢てせずに、長篇執筆に適当な新聞小説にこれを試みた。そして劉玄徳とか、曹操とか関羽、張飛その他、主要人物などには、自分の解釈や創意をも加えて書いた。随所、原本にない辞句、会話なども、わたくしの点描である。

×

いう迄もなく三国志は、中国の歴史に取材しているが、正史ではない。けれど史中の人物を巧妙自在に拉して活躍させ、後漢の第十二代霊帝の代（わが朝の成務天皇の御世、西暦百六十八年頃）から、武帝が呉を亡ぼす太康元年までの凡そ百十二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

年間の長期に亙る治乱が書いてある。構想の雄大と、舞台の地域の広さは、世界の古典小説中でも比類ないものといわれている。登場人物なども、審らかに数えたなら何千何万人にものぼるであろう。しかも、是に加うるに中国一流の華麗豪壮な調と、哀婉切々の情、悲歌慷慨の辞句と、誇張幽幻な趣と、拍案三嘆の熱とを以て縷述されてあるので、読む者をして百年の地上に明滅する種々雑多な人間の浮沈と文化の興亡とを、一巻に偲ばせて、転深思の感慨に耽らしめる魅力がある。

×

見方に依れば三国志は、一つの民俗小説ともいえる。三国志の中に見られる人間の愛慾、道徳、宗教、その生活、又、主題たる戦争行為だとか群雄割拠の状などは、宛ら彩られた彼の民俗絵巻でもあり、その生生動流する相は、天地間を舞台として、壮大なる音楽に伴って演技された人類の大演劇とも観られるのである。

×

現在の地名と、原本の誌す地名とは、当然時代に依る異いがあるので、分って

いる地方は下に註を加えておいた。分らない旧名もかなりある。又、登場人物の爵位官職など、ほぼ文字で推察のつきそうなのはその儘用いた。余りに現代語化しすぎると、その文字の持っている特有な色彩や感覚を失ってしまうからである。

×

原本には『通俗三国志』『三国志演義』その他数種あるが、私はそのいずれの直訳にも依らないで、随時、長所を択って、わたくし流に書いた。これを書きながら思い出されるのは、少年の頃、久保天髓氏の演義三国志を熱読して、三更四更まで燈下にしがみついていては、父に寝ろ寝ろといって叱られたことである。本来、三国志の真味を酌むにはこの原書を読むに如くはないのであるが、今日の読者にその難渋は耐え得ぬことだし、又、一般の求める目的も意義も、大いに異うはずなので、敢て書肆の希望にまかせて再訂上梓することにした。

著　者

目

次

黄巾賊……三
流行る童歌……一五
白芙蓉……二七
張飛卒……三七
桑の家……四六
橋畔風談……六四
童学草舎……七五
三花一瓶……八五
義盟……九八
転戦……一一三

檻車……一二七
秋風陣……一四四
十常侍……一六三
打風乱柳……一七三
岳南の佳人……一七九
故園……一九二
乱兆……一九八
舞刀飛首……二〇六
螢の彷徨い……二一六
呂布……二二五

赤兎馬……二三一
春園走獸……二四三
白面郎「曹操」……二五一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

桃園の巻

黄巾賊

一

後漢の建寧元年のころ。

今から約千七百八十年ほど前のことである。

一人の旅人があった。

腰に、一剣を佩いているほか、身なりはいたって見すぼらしいが、眉は秀で、唇は紅く、とりわけ聡明そうな眸や、豊かな頬をしていて、つねにどこかに微笑をふくみ、総じて賤しげな容子がなかった。

年のころは二十四、五。

草むらの中に、ぽつねんと坐って、膝をかかえ込んでいた。

悠久と水は行く——

微風は爽やかに鬢をなでる。

涼秋の八月だ。

そしてそこは、黄河の畔の——黄土層の低い断り岸であった。

「おーい」

だれか河でよんだ。

「——そこの若い者ウ。なにを見ているんだい。いくら待っていても、そこは渡舟の着く所じゃないぞ」

小さな漁船から漁夫が言うのだった。

青年は、笑くぼを送って、

「ありがとう」と、少し頭を下げた。

漁船は、下流へ流れ去った。けれど青年は、同じ所に、同じ姿をしていた。膝をかかえて坐ったまま遠心的な眼をうごかさなかった。

「おい、おい、旅の者」

こんどは、後ろを通った人間が呼びかけた。近村の百姓であろう。ひとりは鶏の足をつかんで提げ、ひとりは農具を担いでいた。

「――そんな所で、今朝からなにを待っているんだね。このごろは、黄巾賊とかいう悪徒が立ち廻るからな。役人衆に怪しまれるぞよ」

青年は、振りかえって、

「はい、どうも」

おとなしい会釈をかえした。

けれどなお、腰を上げようとはしなかった。

そして、幾千万年も、こうして流れているのかと思われる黄河の水を、飽かずに眺めていた。

（――どうしてこの河の水は、こんなに黄色いのか？）

汀の水を、仔細に見ると、それは水そのものが黄色いのではなく、砥石を粉に砕いたような黄色い沙の微粒が、水に混じっていちめんに躍っているため、濁って見えるのであった。

「ああ……、この土も」

青年は、大地の土を、一つかみ掌に掬った。そして眼を――はるか西北の空へじっと放った。

支那の大地を作ったのも、黄河の水を黄色くしたのも、みなこの沙の微粒である。そしてこの沙は中央亜細亜の沙漠から吹いて来た物である。まだ人類の生活も始まらなかった何万年も前の大昔から――不断に吹き送られて、積もり積もった大地である。この広い黄土と黄河の流れであった。

「わたしの御先祖も、この河を下って……」

彼は、自分の体に今、脈搏っている血液がどこから来たか、その遠い根元までを想像していた。

支那を拓いた漢民族も、その沙の来る亜細亜の山岳を越えて来た。そして黄河の流れに添いつつ次第に殖え、苗族という未開人を追って、農業を拓き、産業を起こし、ここに何千年の文化を植えて来たものだった。

「御先祖さま、みていて下さいまし。いやこの劉備を、鞭打って下さい。劉備はきっと、漢の民を興します。漢民族の血と平和を守ります」

天へ向かって誓うように、劉備青年は、空を拝していた。

するとすぐ後ろへ、だれか突っ立って、彼の頭から呶鳴った。

「うさんな奴だ。やいっ、汝は、黄巾賊の仲間だろう？」

二

劉備は、おどろいて、何者かと振りかえった。

咎めた者は、

「どこから来たっ」と、彼の襟がみをもう容赦なく摑んでいた。

「……？」

見ると、役人であろう、胸に県の吏章をつけている。近ごろは物騒な世の中なので、地方の小役人までが、平常でもみな武装していた。二人のうち一名は鉄弓を持ち、一名は半月槍を抱えていた。

「涿県の者です」

劉備青年が答えると、

「涿県はどこか」と、たたみかけて言う。

「はい、涿県の楼桑村（現在・京漢線の保定—北京間）の生まれで、今でも母と共に、楼桑村に住んでおります」

「商売は」

「蓆を織ったり簾を製って、売っておりますが」

「なんだ、行商人か」

「そんなものです」

「だが……」

と、役人は急に汚い物から退くように襟がみを放して、劉備の腰の一剣をのぞきこんだ。

「この剣には、黄金の佩環に、琅玕の緒珠が提がっているのではないか、蓆売りには過ぎた刀だ。どこで盗んだ？」

「これだけは、父の遺物で持っているのです。盗んだ

物などではありません」
素直ではあるが、凜とした答えである。役人は、劉備青年の眼を見ると、急に眼をそらして、
「しかしだな、こんなところに、半日も坐りこんで、一体何を見ておるのか。怪しまれても仕方があるまい。——折も折、ゆうべもこの近村へ、黄巾賊の群れが襲せて、掠奪を働いて逃げたところだ。——見るところおとなしそうだし、賊徒とは思われぬが、いちおう疑ってみねばならん」
「ごもっともです。……実は私が待っているのは、今日あたり江を下って来ると聞いている洛陽船でございます」
「ははあ、だれか、身寄りの者でもそれへ便乗して来るのか」
「いいえ、茶を求めたいと思って。——待っているのです」
「茶を」
役人は眼をみはった。
彼等はまだ茶の味を知らなかった。茶というものは、瀕死の病人に与えるか、よほどな貴人でなければ喫まないからだった。それほど高価でもあり貴重に思われていた。
「だれに喫ませるのだ。重病人でもかかえているのか」
「病人ではございませんが、生来、私の母の大好物は茶でございます。貧乏なので、滅多に買ってやることもできませんが、一両年稼いで蓄めた小費もあるので、こんどの旅の土産には、買って戻ろうと考えたものですから」
「ふーむ。……それは感心なものだな。おれにも息子があるが、親に茶を喫ませてくれるどころか——あのとおりだわえ」
二人の役人は、顔を見合わせてそう言うと、もう劉備の疑いも解けた容子で、何か語らいながら立ち去っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.